

(1) ワークショップ事業

5 年目となる鹿野学園と青谷高校は基本構造が定着し、内容のアレンジや教員の持ち味を生かした省察活動、他教科などへの波及効果（※1）も見られた。

他の学校での実践も増えた（※2）。昨年度から継続 3 校（逢坂小、三朝中、津ノ井小）に加え、新規 2 校（宮ノ下小、千代南中）から「トリジック WS 体験」への応募があった。昨年初めて実施した「修学旅行 WS」には、島根県を含む 5 校から依頼があり、日程調整できた 4 校を受け入れた。いずれも事前にヒアリングを行い、WS 体験がその場限りでなく、その体験を通しての気づきや学びを、その後の学校生活に活用していけるような連携を意識した。

企業や大人向けの WS の要望もあり、実施体制を整えようとしている。

演劇が人を育て地域を変えるものとして認知され、その輪が広がることを目指し、より深くより広く WS 事業に取り組み続けているが、一方で実践者の「評価されずらい自己」という葛藤もますます明らかになった。（※3）

■【2021 年度実施数】

・鹿野学園＝109 時数（1 ユニットは、2 校時×2 日の 4 校時分。1・2 年生は 1 校時ずつ 2 日連続。）

1 年生 24 人	表 現 に 触 れ る	おしえてリ レー	にんじゃ学 校（ジェス チャーゲー ム）	ジェスチャ ーゲーム	〇〇の一日			8
2 年生 17 人		インタビュー ーリレー	にんじゃ学 校（ジェスチャ ーゲーム）	ジェスチャ ーゲーム	〇〇の伝説			8
3 年生 33 人		むかしばなし メンバー チェンジ	はかせの大 発明	オノマトペ の村→コロ ナで中止				12 → 8
4 年生 26 人	表 現 に 慣 れ る	詩の中の〇 〇に 1 分間 なってみる (1)	詩の中の〇 〇に 1 分間 なってみる (2)	ダンス WS (1)	ダンス WS (2)	メディア WS (1)	メディア WS (2)	24
5 年生 22 人		こわれた千 の 楽 器 (1)	こわれた千 の 楽 器 (2)	絵の中の〇 〇さんと話 してみる	自分が監督自分 が主役→コロ ナで変更			16 → 13
6 年生 34 人	表 現 を 開 く	ちょっとだ け台本	オノマトペ by ヤギ博 士	見立てて演 じる				12
7 年生 21 人		脳内会議	風景をつく る	ダンス WS	メディア WS (1)	メディア WS (2)		20
8 年生 19 人		桃太郎にツ ッコミ	カタルタ情 熱大陸					8
9 年生 35 人	広 げ る	思い出を劇 にしよう	メディア WS					8
								109

・青谷高校＝20 時数（2 校時×10 日）3 年「地域環境芸術」コース生 18 名。

コミュニケーション WS 1 回、演劇系 6 回、ドリコマ 1 回、思い出劇づくり 2 回。

※1。

・**青谷高校**：①担当教員自らがアーティストを活用した授業を計画し、実施した。「写真家との連携授業」、「実際に〈鳥の劇場〉へ来場しての現地学習」。②コンクール入賞。「全国高校生歴史フォーラム」で奈良県知事賞（生徒から「内容は他校の方が優れていると思ったが、うちはパフォーマンスがよかったのではないかと伝えてくれた。」）。「R3〈とっとりごみゼロ〉ポスターコンクール」2人が最優秀賞と優秀賞を受賞。（教員曰く、「じっくりやる生徒なので、切間際まで待った甲斐があった、自信につながった」）

・**鹿野学園**：①学校が「学びの土台になっている」と、手応えを感じている。数学WSでの応用、環境問題も取り入れたWSなど。②キャリア教育につなげる取り組み。青山学院大学の大学生とのWS、コロンビア大学に進学した大学生とリモートで対話など。ゴールイメージが高校進学、という児童生徒が多い鹿野学園にとって、その先をイメージしたり、世界に視野を広げられたりするきっかけとして、もっと取り組んでいきたいとのこと。

※2。

- ・逢坂小 全校30名。5・6年生と台本づくりWS3回、全校での表現WS1回。その後、劇づくり支援。
- ・三朝中学校 3年生54名。修学旅行で来場し、『はだかの王様』観劇＋「ちょっとだけ台本」WS。
その後、台本づくりWS4回、生徒がつくった脚本の「人権劇」の演技サポートWS1回。
- ・津ノ井小学校 6年生修学旅行32名。『がまくんとかえるくん』＋「みんなで一つの風景?!」WS。
1・2年生校外学習72名。『がまくんとかえるくん』＋「なってみよう」WS。
- ・宮ノ下小学校 1～6年の15名。「体を使って伝えよう！」WS1回。
- ・千代南中学校 2年生25名×2回。事前ヒアリングや下見で打合せしていた内容から、感染症拡大状況を受け、急遽リモート版の活動へアレンジ。迅速に対策や接続環境などを学校と連携確認し実施できた。

※3。

青山学院大学社会情報学部「コミュニケーション教育として実施されている演劇ワークショップの実践者に関する研究」調査対象として5名が参加。

■【各校ごとの報告】

○鹿野学園

〈1年生〉メイン講師＝中垣・後藤



一年生は、とてもよく見聞きして内容をよく理解し活動してくれました。進行や説明をよく聞いてメリハリのある活動ができました。私たちに慣れてくると自由でユニークな表現をしてくれる人も多くなりました。一年生の授業では、「ワークショップ体操」というウォームアップが生まれました。振り返り動画を見て、前日の活動を参考にひとりの子が踊りを考えたのが始まりです。それを何人かの子供達でまとめて、ウォームアップでやってみました。振り返りと準備運動を合わせた「ワークショップ体操」はこの学年ならではのものになりました。

最終回のリモートでの授業はどうなるかと思いましたが、一年生の理解力のおかげで楽しい活動になりました。内容が理解しやすい活動はリモートでも可能ですが、すこし難しくなるとやはり対面でできた方がより良いと思いました。

〈2年生〉メイン講師＝中垣・後藤

1年生のときは、少しおとなし目だけど表現の独創性やマニアックさがキラリと光る学級という印象だったのですが、2年生になり元気にふざけたりする様子も見られるようになりつつ、ファシリテーターの声かけには集中してくれている様子から、楽しみにしてくれていることが伝わってきました。表現は1年生の時と変わらず、独創的な人が多く、一斉にやるお題の時でも、自分の思う表現を貫いているなという印象です。





2回目から、担任の先生にもワークショップに参加していただきました。広く見守ってくださるのも、狭くはなりますが一緒に参加して子供たちと表現をやり取りしていただくのも、関わり方としてどちらも良いところがあるなと気づくことができました。（後藤）

二年生は、最終回のリモートでのワークショップで、グループでジェスチャーゲームができたのが、三年生の表現活動に向けてとても楽しみになりました。それぞれ役を決めて、場面をジェスチャーで表す活動です。自分が表現できる役を考えて、グループで話し合い、役をやりきってくれた様子は感心しました。（中垣）

〈3年生〉メイン講師＝中垣・後藤



3年生では、〈色んなアイデアに立ち止まり、想像を膨らませて、それを共有する。〉をねらいとしてメニューを組みました。低学年の人たちだからこそ、基盤となる「面白がる力」の刺激になればと思っています。

ちょっと不思議な言葉の組み合わせを表現してみたり、想像したりするワークが多かったですが、柔軟に受け止めて、自由に表現し、意欲的に楽しんでくれていました。

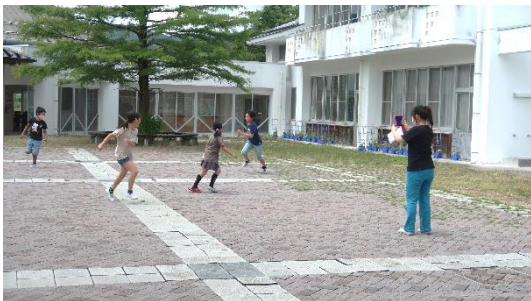
学級を見ていて、自由に表現するためには、個人の意見が否定されない環境はとても大切だなと思います。グループワークがあまり揉めないのですが、共有する力や、お互い

のアイデアを認める力があるのかもしれませんが、また、グループワークを見ていると、推し進める人、みんなをとりもつ人、フォローする人、面白がる人・・・、どれも大事ななあと思います。それぞれに得意な立ち回りがあり、面白いです。これからも〈得意なこと〉が伸びていけばいいなと思いますし、苦手なことでもやってみたら〈意外と面白い！〉にも出会ってほしいです。

コロナ感染拡大により、3年間ワークショップをしてきた締めめの回ができなかったのが、残念でしたが、2セット目のとき、発表が楽しかったという感想が多かったのが嬉しかったです。



〈4年生〉メイン講師＝中島（演劇）／藤田善宏（ダンス）／青学LCD（メディア芸術）



重点学年。3年生までは、体を動かすこと発散することに主眼を置いたワークショップであった。4年生の演劇ワークショップでは、発達段階も加味しながら、自分の心に耳を澄ます少し内省的なプロセスを経ながらのグループ表現活動を目指した。短い詩を題材にして、それを自由に理解し短い場面を作ることが課題。想像によって場面を付け加えて物語として発展させる方法や、モノを演じるコツについて、見本を始めに示すことで子どもたちのやる気・やりたい気持ちを引き出し、多様なグループ発表につながった。

個人差があり、普段は集団活動にあまり参加できていない子どもも、しっかりと充実感を持って創作に参加できたことは、本人にとっても集団にとっても価値ある時間となった。一人一人感じる力があること、その感じ方はみんな違うこと、多様な感じたことをより合わせてグループで一つの表現ができること、それはとても楽しい活動であること、そういうことに会ってもらえたことができた。





9月以降は、ダンスとメディア表現の〈非言語的〉コミュニケーションWSを重ねた。ダンスはリモートによるファシリテーションであったが、子

どもたちの中の、体を直感的・本能的に動かし遊ぶという喜びに火をつけることができた。またメディア表現では、地球環境問題を主題にし、子どもたちの知的好奇心と情報通信機器を使った表現のワクワク感がうまく組み合わせあって、普段の学校活動とは異なる刺激と充実を体験してもらうことができた。

〈5年生〉メイン講師＝中島

義務教育学校である鹿野学園では、5年生はいわゆる小学生としては最上級学年で、6年生になると校舎も変わり制服を着ての登校となる。ワークショップも9年間の学びの前半の総括として、物語世界をしっかりと全身で味わい、想像したことを外化し、他者の表現ともつながり共鳴することに挑戦してもらった。「こわれた千の楽器」では、用済みになって捨てられた楽器の姿や音を想像し、楽器の気持ちを考えてセリフも作り短い場面を創作した。

「絵の中の、」では、発展途上国で困難な状況を生きる子供たちについての想像を主題とし、タブレットや図書館の本を使ってそれぞれの国の状況を調べ、出会ったことのない子供たちに語りかけ、その心情を演じてみた。いずれも、自分達とは全く異なる困難な状況にあるものへの寄り添いであり、グループワークとして全身で想像しイメージを深めることを通じて、5年生児童一人ひとりの心を揺り動かし、掘り起こしながら、表現することの喜びや不思議さ、充実を体験してもらうことができた。



〈6年生〉メイン講師＝齊藤



男女ともに活動的な子が多く、積極的に活動を楽しんでいる印象を受けた。活発な分、「男女間の隔たり」、「自分と異なる意見を持つ“他者”の受け入れが上手くできず、活動（話し合い）が停滞してしまう」という、成長段階に起因する問題もはっきりと現れた。本人たちも改善すべきと感じているので、次年度以降に向けて、持ち前の活発さを損なうことなく、円滑な「他者の受け入れ」を目指していきたい。

〈7年生〉メイン講師＝齊藤（演劇）／藤田善宏（ダンス★）／青学LCD（メディア芸術★）

元々持っていた積極的に関わろう、やってみよう、面白がろうとする力がさらに伸びてきたと感じた。相手を受け入れることにも慣れてきて、みんなで一緒に楽しもうという空気が醸成されてきているように思われる。面白い発想をするが、大人が提示したことを真面目に受け取りすぎて慎重になるきらいがあるので、次年度は「思いついたことを“とりあえず”試してみる」こと、「大きく表現する」ことを促していきたいと思う。





〈8年生〉メイン講師＝齊藤

活動自体がマンネリ化しているように感じられたため、あえて2回目の省察は、鳥劇が「お客様センター（クレーム受付係）」に扮し、WS改善を目指すという初の試み。

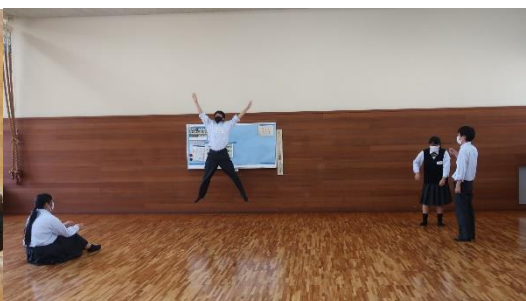
「活動を活性化するためにはどうしたら良いと考えるか？」という投げかけをしたところ、「君たちはできる！」って言葉は聞き飽きた、「もっとワーク時間が欲しい」、「振り返り動画で個人の顔をアップで出すのをやめて欲しい」などの意見があがった。自分が考えていることを表出することに長け、そこに強いこだわりがあるのは間違いない。だが、そのために細かい話し合いがいつまでも続き、手を動かす時間が短くなってしまうことがしばしばあった。細かい部分は後回しにして、「全体を見る」ことを促していきたいと思う。

〈9年生〉メイン講師＝齊藤（演劇）／青学LCD（メディア芸術）

みんなが積極的に活動に関わろうとしていて、最高学年として他学年の手本とならなくてはいけないという自覚が出てきたことを感じた。ワークショップの最後には、ファシリテーターに感謝の言葉を述べてくれた。自分たちを支える他者への意識が強く芽生えると同時に、その人たちに対して素直に感謝を表現することができるという成長を感じた。



○青谷高校



ここ数年、同じ生徒さん達が続けて参加してくれている訳でもないのに年々出席率も上がり、表現の質も右肩上がりに向上しているのには驚かされている。学校としての取り組みやご指導の賜物。今年度は毎回実施直後に、担当の先生方と打ち合わせができたため、それぞれの個性を生かした課題設定や難易度調整ができ授業計画に生かすことができた。

本クラスの、地域環境芸術コースに学ぶ生徒さん達が、第15回全国高校生歴史フォーラム（主催：奈良大学・奈良県）において、青谷上寺地遺跡をめぐる発表を行い、「実証的、優れた研究」と評され、「明瞭で堂々たる」プレゼン態度も高く評価されて、奈良県知事賞を得たことは、トリジユクで学んで下さった事が着実、実践的に生かされていることの証左であり、ワークショップを進める側として確かな手応えを感じている。

授業を楽しみ、内容を良い意味で「遊んで」様々な表現を自分のものにしている。去年迄は特に個性的なキャラクター、強い意志を持った「仕切り屋」的器用なリーダー達が知らず知らずのうちに核となり、何となく他の人は依存して全体が形成される傾向も無きにしも非ずであったが、今年は全く違った。皆がお互いを認め、他の人の声を辛抱強く聞き、その真意を探り、生かそうと団結して工夫し、出て来た他のアイディアに遠慮なくのっかり、意外な発見を悦ぶ、優しさと柔軟さに満ちている、その豊かさに唸らされた。（武中）

★実施前後にアンケートを実施。